

和解の象徴—日中友好の礎

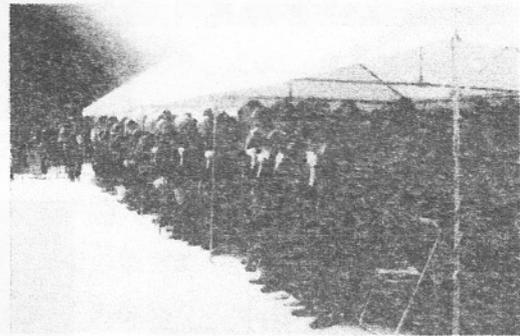
安野発電所の貯水槽と送水管が左上方に見える中腹に記念碑は建立された。受難者代表の邵義誠さん、西松安野友好基金運営委員長の内田雅敏弁護士、西松建設の代理人高野康彦弁護士らが綱を引くと、灰白色の大きな石碑が姿を現した。闊達な筆致で「安野 中国人受難之碑」とある。揮毫をお願いしたのは、この地で亡くなった殉難者の遺骨を、1958年に中国に送還するまで供養していただいた地元善福寺の藤井慧心住職である。

記念碑は、西松建設の中国人強制連行への反省・謝罪・償いの結果として成立した和解の象徴である。立場の異なる組織や個人が、それぞれの関わりの中で道義的な価値観にたって受難者や裁判を支援したからこそ到達した最良の成果なのである。

中央の碑の除幕をしたのは、上記3人の他に、用地提供をお願いした中国電力の光岡敏括コンプライアンス推進部門マネジャー、重大な関心を持って裁判を注視した中国政府から駐大阪総領事館の申森領事、中国人収容所が置かれて「敵国の捕虜」と目された状況と、一方で人間的な住民意識も芽生えた地元の安芸太田町の小坂眞治町長、善福寺藤井慧心住職、坪野在住の梶谷俊造さんらである。

中央の碑を挟んで360名の受難者の名前を刻んだ左右の碑は、それぞれ受難者・遺族の代表4人ずつが除幕した。360名のうち29名は原爆被爆死を含む死没者である。石碑の全高3m60cmと碑面の高さ2m90cmは、受難者と死没者の数にちなんで設計された。石碑の石は中国福建省惠安県南埔鎮の、舞台の石は福建省廈門市海倉区の産。石質と墨跡がよく調和しシンプルな美しさ、和解の精神を入魂した碑の性格が滲みでた姿である。歴史の証人となる建造物にふさわしい風格も備えている。

歴史の真実を継承し、日中の平和を願う



除幕式の冒頭、黙祷する参列者

犠牲者への黙祷で式典が始まった。除幕に先立って、内田雅敏委員長が、「安野で起きた歴史を思い起こし、平和への希望を語る場になることを願う」と建立の目的を述べた。

邵義誠さんにとって除幕式は、仲間への和解報告から1年ぶりの安野訪問で、新たな感慨が湧いた。歴史の真実を刻み「日本の友人とともに正義、公正、人間の尊厳のために勝ち取った成果」と表明。また西松建設が、責任を認め謝罪したことを高く評価し、それが「全ての関係企業が責任を取り、人間の良心に従って強制連行問題を解決することへつながり「真の信頼」が築かれる、と日中友好の道筋を述べた。また記念碑の完成を見ることなく逝った仲間呼びかけた。「非人間的な労働を強いられたこと、一人ひとりの名前を刻みました。安らかに眠って下さい」と。亡き仲間の無念に思いをいたし献花すると、邵さんはこらえ切れず涙がとまらない。

西松建設の代理人高野康彦弁護士は、「受難者と遺族に対し深甚なる謝罪の意を表明するとともに、受難の碑が日中友好に寄与することを祈る」と述べた。

除幕の後、来賓挨拶に移り、安芸太田町の小坂眞治町長、善福寺の藤井慧心住職、広島県議会の東保幸議員、服部良一衆議院議員が挨拶。中国総領事館の申森領事は「日中が再び戦わないよう努力していこう」と

挨拶した。

遺族の無念

広島在住の管楽さん(大連市出身)が二胡を演奏する。「大海啊 故郷」など中国の楽曲が静かに流れる。献花が続く足元で地面を叩いて嗚咽する女性。元原告団長の故呂学文さんの次女呂志英さんだ。父親の名前を見つけた志英さんは碑文に抱きついて声をあげた。カメラが取り囲む中で彼女が繰り返した言葉は、通訳の陳輝さんによれば、「お父さん、何故この記念碑を見ないで死んでしまったの」だった。呂学文さんは晩年をこの目的のために捧げたといっても過言ではない。亡くなる直前までこの闘いのことを気にかけていた呂さん、病床で衰えた姿の写真(今回、志英さんに見せて貰った)は、涙なしには見れなかった。志英さんの無念さが伝わってきた。しかしこれは全ての遺族の胸のうちにある。

共感、交流、そして戦争否定



左から楊世斗さん、呂志英さん、呂志剛さん

除幕式が終わった碑前では、楊世斗・吉嶺さん親子や呂志剛・志英さん兄妹ら遺族たちが紙銭を焼いて死没者を追悼している。その煙の中で、「因縁があるのでお参りしました」と言うのは、地元の谷キヨ子さん(86歳)。中国の人が作業の途中でこっそり家の庭へ来ると母がサツマイモや水をあげ、裸足の人にはワラ草履をあげた。中国の人を親方がたたいて使うのを可愛そうに思っていたという。18歳で志願入隊し台湾方面へ出征した弟も腹がへるからと、中国人に親切にしたのだ。弟は20歳で戦死、還ってきた遺骨箱は空っぽだ

った。「戦争は両方ともええことは一つもないですよ」。お話を聞いて思い出した。息子が中国へ従軍していた坪野の寄田マスさんと呂学文さんの交流、足にケガをして山で仕事に出会った女性から地下タビを貰い、今も大切に保管しているという張立棟さん(香草、今回息子の張子尙さんが来広した)の痛恨だ(女性の名前を聞かず、お礼ができないことを悔やむ)。

また梶谷さんは、中国の人は衣食住が大変だったことを谷さんから聞いて、地元として申し訳ないと思うようになったという。「発電所ができて上水道がつき、夜の電灯制限がなくなったのは中国の人のおかげです」と。受難者たちは、地元から交戦敵国の捕虜と見られがちだったが、必ずしも敵視されていた訳ではなかった。山口県で中国人留学生の世話をする内田喜美子さん(10歳まで土居に住む)には、敗戦後に受難者が家に来て食べ物を要求した時、敵意や恨みはなかったようだ。同情、共感、極めて人間的な心情から交流が生まれ、戦争否定の心情も湧いていたと思われる。碑の完成を機に記憶に止めておく必要があると思う。

二度と悲劇を生まない努力を

昼食後、収容所跡を廻る。上流の香草へ向かう。当時中学生で近所に住んでいた栗栖薫さんが証言。食事は当初コーリャンだったがそのうちドングリ粉のマントウに変わり、副食なし。「塩もなかった」と楊希桂さんが一言。トンネルの中は天井から湧き水がジャージャーと落ち全身ズブ濡れで12時間働いたこと、中国から着てきた夏服と靴がボロボロになり、裸足の人もいたこと。その年(1944~45)の冬は特に雪が多く35cm



栗栖さんの証言を聞く生存者・遺族・家族

も積もったことなど苛酷な労働実態を証言。栗栖さんが「水と石との闘い」というこの現場は、故宋継堯さんがトロッコ転覆事故から治療もされずに失明した現場。



初めて1人で来日し、平和を訴える宋建剛さん

息子の宋建剛さんが、「父からここでの話を聞いてつらかった。何回も一緒にここへ来たが、父は和解成立後に亡くなりました。日本の皆さんに言いたい。あのような悲劇を二度と起こさぬように努力しましょう」と。1995年西松建設本社での交渉で、記念碑の建立を要求した宋継堯さん。息子からすれば、碑の完成を一緒に見れなかった口惜しさだけではなかった。「悲劇を二度と繰り返さない努力」の呼びかけが胸にこたえた。

苛酷で絶望的な収容所生活

発電所の上流8キロ、土居の取水堰に向かう。発電所に川水を送るため中国人を強制連行して掘削させた導水トンネルの始まりだ。

邵義誠さんの証言を聞く。19歳のとき父親が拉致され、家族を支えるためにタバコを仕入れに行った青島で捕まり強制連行された。ここでの仕事は川に入って石を取り除き流れをよくすること、重い皮膚病(疥癬)にかかり頭髪が抜け落ちる、仕事を休むと食事を減らされる、8人の逃亡者が出てすぐ捕まり見せしめに仲間の前で殴るなど苛酷で絶望的な収容所生活だった。そして突然の本国送還。病気で働けない13人を厄介払い同然に強制送還したのだ。帰国後母親の死亡を知り、治療のため家を売却、国共内戦に巻き込まれ国民党軍

に徴用されるなど、苦難の連続だったこと、仕事を得て結婚したのは解放後のことで、強制連行が邵さんの人生を大きく変転させたことが語られた。1996年に劉宝辰先生が家に来て、日本の友人と共に西松建設と闘うことになった。今、記念碑ができて歴史の真実が残り安らかな気持ちであると。

郭愛華さん(52歳、天津市在住の郭成章さんの娘)が発言。父は17歳のとき騙されて強制連行され、ここで川の石を拾い出す仕事をさせられた。「ここに立つと父の苦難を思い感無量。記念碑ができて中国人の尊厳をとりもどすことができた」と述べた。



初来日の遺族・郭愛華さん

調査活動を続ける王彦玲さん

次に、河北大学の劉宝辰教授夫人の王彦玲さんが発言。大学図書館に勤めながら、劉教授の受難者調査に協力してきた。王さんは初めての来日だが、私たちとは周知の関係だ。1993年の訪中以来、お世話になっている。劉教授が講義や出張中には、訪問した受難者の話を聞き取り、記録して資料を作り、実際に現地へ出向き調査に加わった。王さんの調査でたくさんの受難者が探し出された。

真の日中の信頼を築こう

記念碑の完成によって、安野の歴史の証人として、日中友好の礎ができた。多くの企業が西松建設の後に続くことを切に願う。「真の日中の信頼」を築くための道程は平坦ではないが、引き続き努力していきたい。